

18世紀のフランス=レヴァント貿易と国際金融（下） ：ルー商会文書の為替手形

深沢，克己

<https://doi.org/10.15017/1904663>

出版情報：史淵. 133, pp.1-31, 1996-02-29. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

18世紀のフランス＝レヴァント貿易と国際金融(下)

— ルー商会文書の為替手形 —

深 沢 克 己

IV. レヴァントの商人と手形振出経路

すでに述べたように、¹⁾ルー商会を中心とする手形引渡経路が集中的性格をもち、資金移動の明瞭な輪郭を与えるのに対して、その振出経路はより多様で分散的な性格を示し、未知の人名が次々に出現するために、問題ははるかに複雑になる。しかしそれにもかかわらず、データの綿密な分析を通じて、この経路の主要な特徴を再構成することができる。

まず図表14は、イスタンブル(およびブルサ)について、相対的に出現頻度の高い振出経路を示している。①に列記したイスタンブル在住の振出人、すなわちラザル・ダルマス商会、ジャン＝アンドレ・アンリ商会、ラサル、リクルフ商会、ピエトロ・ヴァッサーロ兄弟&息子社は、相互に無関係な寄せ集めに過ぎない。このうち前三者はルー商会の取引先であり、²⁾特にジャン＝アンドレ・アンリ商会が手形の買取や裏書に重要な役割を演じたことは、すでに観察したとおりである。この事実は一見して、「振出手形」と「引渡手形」との区別を強調する本稿の観点に矛盾しているように思われる。しかしこの場合、イスタンブルの商人は、ルー商会に送金する目的で、現地市場で手形を購入する代わりに、自らの債権に基づいて手形を振出す方法を用いている。すなわち振出人は買取人の機能を兼ね、自らルー商会またはその代理商を受取人に指定するので、彼は振出側と買取側の双方に属することになる。³⁾これに対して最後のピエトロ・ヴァッサーロ兄弟&息子社は、ルー商会とは取引がなく、その手形は市場

での売買を通じて後者に引渡されている。

これらの手形の支払人は、その大多数がマルセイユ商人である。比較的よく現われる人名の中には、ジャン＝ジョアシャン・スリアン末子やジョゼフ＝フランソワ・マジヤストルのように、18世紀マルセイユを代表する富裕な商人家系が含まれる⁴⁾。ラザル・ダルマス商会が、トゥロンのムテル兄弟社やリヴォルノのアントニオ＝フランチェスコ・サルッチ&息子社に宛てて数枚の手形を振出したのは、むしろ例外的な場合である。またピエトロ・ヴァッサーロは、名前から判断してイタリア人と思われるが、大多数の手形をマルセイユ商人ラフレシュ、ラフィネスク商会に宛てて振出している。

続いて②は、1780年代後半にイスタンブルからブルサに移動したオゼ系商社の事例を示す。この商社は最初はオゼ兄弟&パステュレル社を名乗り、後にオゼ兄弟、パステュレル&ダヴィド社に商号を改め、間もなく活動の場をイスタンブルから旧首都ブルサに移し、最後にはフランソワ・オゼ、アルル商会の名で現われる。彼らは明らかにフランス人であるが、ルー商会との取引関係はなく、その手形はイスタンブル市場での売買と裏書を通じて、最終的にルー商会に引渡される。主要な手形支払人はマルセイユ商人フランソワ・オゼおよびレノ兄弟社である。

要するにイスタンブル(およびブルサ)からの振出経路の大部分は、ルー商会との取引関係の有無にかかわらず、マルセイユに集約されるフランス商業回路に属する。イスタンブルの振出人は合計30名を数えるが、そのうち22名(73%)がフランス人であり、したがってこの市場では振出経路と引渡経路との間に目立った乖離は認められない。

これに対して、イズミルからの振出経路はより広い多様性を示す。その一部は同様のフランス商業回路に属するが、他の一部はそこから分離して、異なる商業ネットワークを構成するからである。まず図表15は、イズミルからのフランス宛手形の振出経路を表す。①に列記した振出人はいずれもルー商会の取引先であり、主要な手形買取人としてすでに名前を引用している。前三者のガラヴァク&キュソン社、カイヨル、キュソン商会、カイヨル商会は継承された同

一の商社であり、ルー商会を支払人とする手形を多く振出している点に特徴がある。これはルー商会自身を支払側に位置させる例外的な場合であり、時期的には1785年以前に限られている。他の支払人もすべてマルセイユ商人であり、ガラヴァク系のラティ兄弟社、西南ドイツ出身のプロテスタント商人ジャン＝ジャック・キック⁵⁾などが含まれる。これに比べてマルタン&ルプール社とポリ、トルネジ商会による振出手形の事例は少なく、ギヨーム・ルヴィエ&ヴォトレ社やエティエンヌ・マルタン⁶⁾その他のマルセイユ商人に宛てて数枚の手形を振出したに留まる。後二者の事例は、イスタンブル代理商の場合と同じ方法が、イズミルでも時に用いられたことを証明するに過ぎない。

次に②の商人たちは、ルー商会とは直接に取引のない一群の振出人を代表する。A・シャポー商会はパラル、リュラン、シャルトン商会その他の支払人に、ヴィクトル、ミシェル商会はもっぱらシャナール商会に、ジャン＝バティスト＝ベルナル・ロボリはマジヤストル兄弟商会に宛ててそれぞれ手形を振出している。これらの支払人は、ジュネーヴ出身のプロテスタント商人パラル、リュラン、シャルトン商会⁷⁾を含めて、すべてマルセイユ商人である。ニコラ＝ブレーズ(またはニココロ＝ピアージュ)・ドラガリツァが、ジョセフ＝フランソワ・マジヤストルの他にリヴォルノ商人ジョヴァンニ・カンピアーゾ・ディ・ドメニコに宛てて若干の手形を振出したのは、例外的な事例に属する。

しかし以上に代表的人名を挙げたフランス宛振出経路は、イズミルから発送される手形の一部を吸収するに過ぎない。イズミルの振出人は合計125名を数えるが、そのうちフランス人と見做されるのは31名(25%)であり、振出された手形294枚のうち104枚(35%)のみが彼らの署名を帯びている。それゆえイスタンブルの場合とは異なって、イズミルからの振出経路ではフランス人は少数派に属し、さまざまな「外国人」が多数を占める。前述した手形流通空間の国際的性格は、後者の商業回路の広がり起因する。

図表16に示された二組の人物群は、このヨーロッパ宛手形の振出経路を構成する最も有力な商人集団を表している。とりわけ④のクルムシ系商社は出現頻度の高さに際立っており、イズミル為替市場におけるその役割の重要性を推定

させる。列記された商号のうち最初の四つ、すなわちクムシ&バルタツジ社、クムシ、バルタツジ商会、クムシ、バルタツジ、ペラキ商会、およびクムシ、ペラキ商会はその名称から明らかなように、1771年から1789年まで継承された同一の会社である。この他にデメトリオ・クムシ、ニコラ・パナヨティ商会、ミケッレ・クムシ(商会)、ステファノ・クムシが加わって合計32枚の手形を供給している。言うまでもなく、それは彼らが振出した手形のほんの一部に過ぎないはずであるが、しかしルー商会の現地代理商が、クムシ系商社の手形を「優良手形」と見做していたことは疑いない。⁽⁸⁾ 研究の現段階では、このクムシ一族の出身や構成や活動については何もわからない。しかし多くの点から判断して、彼らがイズミルを拠点とするギリシア商人の集団に属していたことは確実である。共同経営者バルタツジの名前は、独立にデメトリオ・バルタツジ息子商会としても現われるが、彼らは19世紀前半にマルセイユに移住して、ロシア産小麦貿易を営んだ同名のギリシア商人とおそらく同じ家系であろう。またもう一人の共同経営者ニコラ・パナヨティは、18世紀末以降キプロス島やリヴォルノで活動した同名のギリシア商人家系の一員だった可能性がある。⁹⁾

クムシ系商社の手形のうち20枚はオランダ宛、10枚はイタリア宛、2枚はオーストリア宛に振出されている。支払人リストの筆頭に挙げたアムステルダムのトマサキ商会(最初の一度だけトマサキ、アナスタツシ商会の名で現われる)は、名前から判断しておそらくギリシア人であるが、合計15枚の支払人として現われる。これに比べれば、ロッテルダムのハルトーフト、スピーケルマン商会、リヴォルノのガブリエッロ・ディ・サルヴァドーレおよびジョヴァンニ=カルロ・ジエーラ、ジェノヴァのフランチェスコ=マリア・ジエーラ&息子社、トリエステのギリシア商人ゲオルギオ・カキコプロ商会は、それぞれ2~3枚の支払人になっているに過ぎない。イズミルのギリシア商人とトマサキ商会との密接な関係は明らかである。クムシ系商社の他に、数名の振出人がトマサキ商会に宛てて手形を発行しているが、彼らの大多数、おそらく全員がギリシア商人であり、その中にはブラッサカキ&アヴィエリノ社(Prassacachi et

Avierino)やデメトリオ&ニコロー・バカトリ社(Demetrio et Nicolo Bachatori)が含まれる。プラッサカキはキオス島の名門貴族の家系で、18世紀に一部がイズミルに移住して貿易を営み、さらに1816年以降はマルセイユにも商社を設立して、トルコ産綿花やロシア産小麦の貿易を営んでいる。また盛衰の激しいイズミルのギリシア人商業界において、バカトリは比較的長く、19世紀初頭まで事業を維持したことが知られている。¹⁰⁾

続いて②のマヴロゴルダト系商社もまた、ギリシア商人の有力な国際商業ネットワークを表現する。最後の一家を除いて、列記した商号はすべてイズミルの商社であり、1787年から1789年までの3年間に合計16枚の手形を供給している。すなわちE・マヴロゴルダト&ディアマンディ・ペトリキ社、ヨアンニス・マヴロゴルダト、ヨアンニス・アナスタツシ商会、マヴロゴルダト、イサイア商会、ロイディ、マヴロゴルダト商会、ミケーレ・マヴロゴルダト、パオロ・ディ・C・マヴロゴルダト、ストラッティ・ニッコロ・マヴロゴルダト商会は、ほぼ同時に活動した企業であり、相互の継承性はないと考えられる。最後のパオロ・マヴロゴルダト商会だけがイスタンブルにあり、1777-1780年に3枚の手形を振出している。現状では、イズミル、キオス島、イスタンブルに足場をもつこの商人家系が、18世紀初頭にオスマン帝国の宮廷通訳官を務めたギリシア人アレクサンドロス・マヴロコルダト(Alexandro Mavrocordato)、その息子でモルダヴィアとヴァラキアの支配者に任命されたニコラオス、およびギリシア独立戦争中に最初の大統領に選ばれたアレクサンドロス・マヴロコルダトのような政治家とどのような関係にあったかは明らかでない。¹¹⁾ 確実なことは、18世紀末以降のイズミルのギリシア人商業界において、マヴロゴルダト系商社が卓越した地位を占め、19世紀にはトリエステ、リヴォルノ、マルセイユに家族の一部が定住し、黒海からレヴァント、イタリア、オーストリアに及ぶ国際貿易を営んだ事実である。¹²⁾

マヴロゴルダト系商社の手形のうち17枚はアムステルダム宛、わずか2枚がオーストリア宛に振出されている。支那人として重要なのはアムステルダムのステファノ・ディサイ商会(10枚)であり、ミケーレ・ファリエーロ商会とスタ

マティ・ペトロ商会がこれに続く。ステファノ・ディサイはイズミル出身のギリシア商人であり、早くも1760年代からアムステルダムの現地代理商として、郷里のギリシア商人と活発な取引を営んでいた。19世紀初頭にイズミルで活躍したマノリ・ディサイ (Manoli d'Isay) & 息子社は、彼の親族である¹³⁾。スタマティ・ペトロ商会と同じくギリシア人だったことも確実である。またトリエステのデメトリオ・ディ・ジョヴァンニ商会、ウィーンのエコモ兄弟商会についても、同様の可能性が考えられる。イズミルのギリシア商人にとって、ステファノ・ディサイがトマサキ商会と並ぶ重要な取引先だったことは疑いない。マヴロゴルダト系商社の他に10名の振出人がディサイを支払人とする手形を発行しているが、その過半数はジョヴァンニ&アンドレア・プシカ社 (Giovanni et Andrea Psicha) を始めとするギリシア人である。もしもこのイズミルのプシカ社と、1800年前後からイスタンブルを拠点にペルシア貿易を営んだスタマティ・プシカ、および彼の息子で1817年以降マルセイユに定住し、フランス繊維製品の輸出に貢献したゲオルギオ・スタマティ・プシカとの関係が明確になれば、¹⁴⁾レヴァントとヨーロッパとを結ぶギリシア商人ネットワークを表現する興味深い一例になるだろう。ともあれトマサキ商会とステファノ・ディサイ商会の二社だけで合計42枚、これにスタマティ・ペトロ商会の4枚を加えれば、三社でアムステルダム宛手形の60%を支払った計算になる。要するにクルムシ系およびマヴロゴルダト系商社に代表される「外国人」の手形振出経路は、何よりもまずギリシア人の掌握するイズミル＝アムステルダム商業・金融回路の存在を浮かび上がらせる。

図表17は、以上の観察を補完し拡張する。③のラッリ系商社は、1780-1789年の間にラッリ、プシカ商会、ラッリ、ペトロキノ、トマ商会、ラッリ兄弟商会、ミケツレ・ラッリ商会、デメトリオ・テオドロ&ラッリ兄弟社の商号で現われ、相互の関係は明らかでないが、経営者はすべてギリシア人である。ラッリ家もまた、前出のブラッサカキ家と同様にキオス島の名門貴族の家系に属する。18世紀末に彼らはイズミル屈指の商社を経営し、リヴォルノにピエトロ・ラッリ商会を配置するが、さらに1816年にはパンディアおよびアウグスト・ラッ

り兄弟がマルセイユに移住し、同じくキオス島出身の商人パンタレオン・アルゲンティ (Pantaleon Argenti) と共に合名会社を設立して、イズミルを本拠にイスタンブル、オデッサ、アレクサンドリア、トリエステ、ウィーン、リヴォルノ、マルセイユ、アムステルダム、ロンドン (“Ralli Brothers”) に拠点を拡大し、1837年以降はペルシアのタブリーズに到達するキオス＝ギリシア商人の国際事業網を形成する。¹⁵⁾ ラッリの名を記した数枚の為替手形は、彼らの勃興を示すささやかな証言に過ぎない。

これらの手形の支払人は四つの都市に分散し、明確な特徴は見出されない。ここでは前出のステファノ・ディサイ商会に加えて、リヴォルノのギリシア商人パオロ・ロドカナキ商会の存在に注目するに留める。ロッテルダム (デ・フォーヘル兄弟社) とトリエステ (デメトリオ・カルキオティ) については、後に改めて論じる。

これに対して、④は単純明快な振出経路を表している。1789年の一年間に、ゲオルギオ・ホメロおよびヨアンニス・ホメロ息子商会は合計6枚の手形を振出しているが、それらの支払人は例外なくリヴォルノのペトロコキノ & ロドカナキ社である。ゲオルギオ・ホメロ商会はギリシア独立戦争の勃発する時までイズミルに存続し、マルセイユに移住した息子テオドロ・ホメロとの間で主に羊毛貿易を営んだが、1822年には父もマルセイユに亡命し、息子と共にホメロ父子社を設立する。テオドロはマルセイユで革命的思想の持ち主として知られ、¹⁶⁾ 反乱と独立運動の熱烈な支持者だった。

支払人のペトロコキノとロドカナキは、いずれもキオス島出身のギリシア商人であり、特にペトロコキノ家は同島で最も古く高貴な「五大貴族」(Pentada) の家門に属していた。同郷のラッリ家およびアルゲンティ家の人々と協力して、ペトロコキノ家の商人は18世紀末以降のイズミルで、少し後にはイスタンブルでも商社を経営し、1820年にはマルセイユに移住したミケーレ・ペトロコキノが新会社を設立する。1822年4月の有名な「キオス島の虐殺」によって、ミケーレは父と兄弟とを失うが、虐殺を免れた一族の人々は、同じ運命に襲われたブラッサカキ家、ラッリ家、アルゲンティ家、その他多くの住民と同様に島を脱

出し、まずトリエステに亡命した後にリヴォルノやマルセイユに移住した。¹⁷⁾この事件は、その直前にキプロス島とイズミルで起きた類似の虐殺事件¹⁸⁾と共に、ギリシア人の「離散」(diaspora)を加速したが、結果的には彼らの国際事業網を拡大強化する方向に作用した。宗教的迫害によりイベリア半島を追われた15世紀末以降のユダヤ人、サファヴィー朝国王の強制移住政策により郷里を離れた17世紀初頭以後のアルメニア人の事例とよく似た現象が、19世紀前半の東地中海に発生したのである。

ロドカナキ家の場合は、この「離散」の影響を示す一例である。1780年以降のリヴォルノでは、彼らはパオロ・ロドカナキ商会、コスタキ(Costachi)、ペトロコキノ&ロドカナキ社、およびペトロコキノ&ロドカナキ社の商号で現われ、合計12枚の手形支払人になっている。振出人は、ホメロ系商社を含めて全員がイズミル在住のギリシア商人である。また19世紀初頭のイズミルでは、デメトリオ・ロドカナキ商会およびフランギアディ(Frangiadi)&ロドカナキ社が屈指の商社に数えられた。¹⁹⁾しかしプラッサカキ家やペトロコキノ家の場合とは異なり、ロドカナキ家の人々がマルセイユに移住し始めるのは1822年の虐殺事件の直後からである。その中心人物エマヌエレ=パオロおよびステファノが設立したロドカナキ息子商会は、間もなく黒海貿易の拡大に成功し、1830年代にはロシア産「オデッサ」小麦の輸入貿易の分野でマルセイユ最大の商社に成長した。兄のエマヌエレは1833年にフランスに帰化し、一団の船舶に加えて、マルセイユ市内に数々の不動産を所有した。²⁰⁾18世紀末のリヴォルノに話題を戻せば、このロドカナキ系商社にゲオルギオ・コスタキ&息子社、ヨアンニ・アルギリ(&)ヴレット(Gioanni Argiri Vretto)および前出のピエトロ・ラッリ商会を加えると合計18枚を数え、リヴォルノ宛手形の32%がギリシア商人宛に振出された計算になる。アムステルダムの場合ほど支配的ではないが、イズミル=リヴォルノ間の振出経路においてもギリシア商人の役割は重要である。

以上に列挙した人名に加えて、手形振出人リストの中にコンスタンティ・スキリッジ商会(Constanti Schilizzi et C^{ie})およびスカナヴィ・パッテラキ&スキリッジ兄弟社(Scanavi Patterachi et frères Schilizzi)の商号で散見されるス

キリッジ一族の名前を引用すれば、イズミルからの振出経路に出現する重要なギリシア商人の人物誌をほぼ網羅したことになるだろう。前出のペトロキノ家およびアルゲンティ家と並んで、スキリッジ家はキオス島の「五大貴族」の家門であり、その祖先は遠くビザンツ帝国の時代にさかのぼる。18世紀末以降、一族は他の多くのキオス商人家系と類似の展開過程をたどるが、むしろ彼らの事例を通じて強調すべき点は、キオス島やイズミルのギリシア商人家系が、事業上の協力関係に留まらず、しばしば婚姻関係によって相互に結びついていた事実である。例えば1803年にマルセイユに移住し、イズミルから輸出されるトルコ産綿花の貿易に従事したピエトロ・ホメリディ・スキリッジは、その名が示すようにホメロ家の娘ゾエ(Zoë)を母としてイズミルで生まれた。それゆえ同じくマルセイユに移住したテオドロ・ホメロとは親戚の関係にある。また同じ頃アレクサンドリアに居住したエマヌエレ・スキリッジの妻は、パンタレオン・アルゲンティの妹だった。そしてマルセイユに移住したニコロ・ブラッサカキの妻は、カテリーナ・スキリッジである。²¹⁾ 19世紀初頭の現実はおそらく18世紀以前からの伝統であり、もしも家系相互間の婚姻関係を完全に再構成することができれば、以上に引用したキオス島とイズミルのギリシア商人家族の大部分は、おそらく星雲のように渾然一体となった相貌を呈するに違いない。

これらの人々を含めて、イズミル在住の振出人総計125名のうち確実にギリシア人と見做されるのは最低45名(36%)、おそらくは57名(46%)を数え、彼らが101枚ないし116枚(全体の34~39%)の手形を発行している。すなわちギリシア人は、人数の点でフランス人を上回り、手形数の観点から見ても彼らと拮抗する。この両者で手形総数の約7割を供給した計算になるので、イズミルの為替市場は、ルー商会の現地代理商にとって、主にフランス人とギリシア人の振出す手形の買取市場だったと考えてよい。

その他の「外国人」の中で比較的よく現われるのはオランダ人であり、イズミル=アムステルダム振出経路でギリシア商人が支配的役割を演じたのに対して、ロッテルダム宛手形についてはオランダ商人の比重が大きくなる。図表18は、このイズミル=ロッテルダム振出経路に出現する代表的なオランダ商人の

事例を示す。⑤のダヴィド・ファン・レネップ&(ウィレム・)エンスリー社は、当時のイズミルで最大のオランダ人商社であり、その事業は商品取引よりも貨幣取引と為替業務に重点を置き、典型的な「商人＝銀行業者」の実例を与えている。1770年代には、同社とトーマス・デ・フォーヘル商会(Thomas de Vogel et C^{ie})の二社が、イズミル＝オランダ貿易の約半分を実行し、ギリシア商人が残りの半分を運営していたと言われる。²²⁾同社の振出した手形は10枚あるが、そのうち7枚がロッテルダムのファン・レネップ&息子社宛であり、残りはジェノヴァ(ジュゼッペ＝アンドレア・バンサ商会など)およびリヴォルノ(オットー・フランク商会)の取引先宛である。すなわち親族の経営する関係会社への手形発行が中心になっている。

これに対して⑥のギヨーム・フーティング商会は、「独立自営」の企業の一例を示し、特定の本国商人の代理商にはならず自由な取引を営み、フランス商人とも密接な関係にあった。²³⁾同商会の残した手形のうち4枚はロッテルダムのデ・フォーヘル兄弟社とエステイエヌ・スエルモント&息子社に、他の2枚がアムステルダムのヨハネス・メネフェン他の取引先に宛てて振出されている。総じてロッテルダム在住の支払人はすべてオランダ人であり、その中ではデ・フォーヘル兄弟社(14例)とファン・レネップ&息子社(8例)の出現頻度が高く、両者だけで約8割の手形に関与している。ただし後者がもっぱら親族会社間の業務に関わるのに対して、前者は主としてギリシア商人の振出す手形の支払人になっている。

同様の事態は、イタリア宛の手形振出経路についても観察される。リヴォルノのジョヴァンニ＝カルロ・ジエーラ、後にジョヴァンニ＝カルロ・ジエーラ&息子社、およびジェノヴァのフランチェスコ＝マリア・ジエーラ&息子社は、合計17枚の手形支払人として現われ、ギリシア人のロドカナキ系商社と並んで最も出現頻度が高い。しかしジエーラ一族がおそらく「純粋な」イタリア人であるとしても、彼らを支払人に指名したイズミル在住の手形振出人の中では、親族であるジョヴァンニ＝カルロ・ジエーラ息子商会に加えて、クルムシ系商社を筆頭とするギリシア商人がかなりの割合を占める。研究の現段階では、オー

ストリア宛手形の支払人リストに含まれるギリシア商人の人数を算出することはむずかしい。トリエステ宛およびウィーン宛に振出された29枚の手形は、16名の支払人の間に分散しているが、そのうちで確実にギリシア人と見做されるのは、前出のデメトリオ・カルキオティとゲオルギオ・カキコプッコ商会を含む5名(31%)である。しかし調査が進めば、この人数は10名(63%)以上にまで増える可能性がある。不確かさを残すひとつの理由は、トリエステとウィーンに移住したギリシア人の多くが、キオス島出身の貴族のような有力な商人家系ではなく、主にモレア(ペロポネソス半島)、次いでマケドニアやイオニア諸島の比較的質素な家系の出身だったからである。デメトリオ・カルキオティの場合がその一例であり、彼は1775年にモレアからトリエステに移住し、まず同郷人の通訳と船食の供給の仕事から始めて、やがて船荷受託業者になり、最後にはレヴァント貿易商人として巨額の財産を築いた。²⁴⁾

それゆえ手形振出経路のプロソグラフィがほとんど無限の作業を要求し、常にある程度の不確定要素を残すとしても、そこでギリシア商人の演じた枢要な役割についてはもはや疑問の余地がない。1790年6月に、イズミルの代理商クジネリ兄弟社がルー商会に書き送った手紙は、この間の事情をよく伝えている。「最近のマルセイユ宛手形は28 1/2%の為替レートで取引されました。優良な署名を選べば、これが最もあなた様の利益にかなう手形であろうと思います。その他の市場宛については、どうしてもギリシア人の手形を買取らなければなりません、今日では信頼に値する商社はほとんどありません。大多数の商社に対する信用は完全に中断され、本当に財力のある商社だけが、その安定性を誇っているのです」²⁵⁾。ギリシア人商社に対する信用の問題を別にすれば、イズミルの為替市場における基本的選択の範囲は、この上もなく明快に述べられている。

V. 解釈と考察の試み

以上に実行した一連のデータ分析の成果を総括し、一度分離した引渡経路と

振出経路とを再び接続させたのが図表19である。ここには二種類の手形流通回路が認められる。図の内側はイズミルとイスタンブル(またはブルサ)を起点としてマルセイユに到達する回路であり、振出側・引渡側の双方ともにフランス商人の取引網を構成し、両者の間に大きな乖離は存在せず、部分的には錯綜している。これに対して図の外側は、主にイズミルを起点としてヨーロッパ諸都市に広がる国際的な回路を表す。そこでは振出側と引渡側とが乖離し、後者はルー商会の取引先であるレヴァント在住のフランス人代理商、およびヨーロッパ各地の商人＝銀行業者を両翼として成立するが、前者はイズミルを拠点にアムステルダム、リヴォルノ、トリエステ、ウィーンに広がるギリシア商人のネットワーク、イズミルとロッテルダムを結ぶオランダ商人の事業組織、リヴォルノとジェノヴァに拠点を置くイタリア商人の取引網などから構成される。

ただしこの図に含まれる未検討の要素はレヴァント在住の受取人であり、その分析を補って為替手形のプロソポグラフィを完成する必要がある。前述のように、一部の手形は始めから裏書を前提にして、イズミルまたはイスタンブルの取引先を受取人に指定する(図表4)。受取人がイズミルに所在する手形は51枚あり、そのうち1枚を除くすべてが同じイズミルで振出されている。これに対して受取人がイスタンブルに所在する手形は85枚を数えるが、そのうち27枚だけがイスタンブルで振出され、他の大部分(48枚)はイズミルで発行されている。イスタンブルで振出されるマルセイユ宛手形が、ルー商会の現地代理商を受取人に指名する事例については、すでに検討済みである。(図表12-①②③-(b))。またブルサのオゼ系商社の振出した手形は、イスタンブル在住のステファニ・ステファノ(Stefany Stefano)を受取人に指名し、後者がこれに裏書してグルデス、クレスパン商会に譲渡する(図表14-②、12-③-(d))。この場合には、たとえステファノがイタリア人であっても、基本的にフランス商業回路の内部に留まっている。

しかしイズミルで振出されるヨーロッパ宛手形の受取人リストは、若干の新しい人名とともに、レヴァント市場内部の取引関係について情報を与える。イスタンブル在住の受取人として比較的よく現われる人名は、まず前出のパオ

ロ・マヴロゴルダト商会(6例)であり、同商会は主にクルムシ&バルタツジ社の振出した手形をジャン=アンドレ・アンリ商会に売却している(図表16-①、12-①-(c))。次にニコラ・ロラン商会(7例)はフランス人商社であるが、イズミルのロラン息子などを通じてギリシア人の手形を受取り、アンリ・ダヴィド商会に裏書譲渡している(図表12-②-(d))。最後にオランダ系商社ヒュブス&ティモニ(Hubsch et Timoni: 6例)は、ダヴィド・ファン・レネップ&エンズリー社の手形に裏書し、ジャン=アンドレ・アンリ商会に譲渡する(図表18-⑤、12-①-(d))。他方イズミル在住の受取人としては、前出のヨアンニス・マヴロゴルダト、ヨアンニス・アナスタツシ商会およびアンドレア・カッパリ、ストラッティ・マヴロゴルダト商会(Andrea Cappari, Stratti Mavrogordato et C^{ie})の名で現われるマヴロゴルダト系商社の頻度が高い(7例)。彼らは雑多な手形を買取り、イズミルのフランス人代理商に売却している。残りは多数の受取人の間に分散しており、その中では前出のブラッサカキ&アヴィエリノ社、カジ・タノ・アレッサンドロ(Chazi Thano Alessandro)、ジョヴァンニ=カルロ・ジエーラ息子商会、ルベン・フランケッティ(Ruben Franchetti)の名がそれぞれ3度ずつ現われる。前二者はギリシア人商社であり、手形の振出人もすべてギリシア人である。ジエーラ一族についてはすでに触れたが、最後のルベン・フランケッティはおそらくリヴォルノ出身のユダヤ商人であり、取引関係のあるルー商会に手形を裏書譲渡している²⁶⁾。この最後の一例を除けば、以上に列挙した受取人はいずれも裏書の行為を通じてルー商会の現地代理商に手形を売却するので、実際の為替市場では振出人と同じく手形供給者として現われる。それゆえこの観点から眺めれば、手形供給者としてのマヴロゴルダト系商社の役割は一層大きなものになる。

レヴァント市場とヨーロッパ諸都市を結ぶ手形流通回路の構造、およびそこに配置された多様な人物群の分析は、さしあたり以上で充分であろう。残された課題は、この一連の資金の移動が何を意味するか、言い換えれば為替手形の取組・流通とヨーロッパ=レヴァント貿易との間に、どのような内的関連が存在するかを考察することにある。この場合にも振出手形と引渡手形の区別が有

効であり、そこからもう一つの概念的区別が派生する。すなわち振出人(または裏書人)と買取人との間で行なわれる手形売買は、第三者宛の請求権の売買を意味し、為替手形は金融の手段として機能する。これに対して振出人と支払人との間、および買取人と受取人(または譲受人)との間では、為替手形はそれぞれ商取引の決済手段として現われる。なぜならば振出手形は振出人の支払人に対する債権の回収に用いられ、引渡手形は買取人の受取人に対する債務の弁済を目的とするからである。

(A)引渡手形。ルー商会のポートフォリオに含まれるレヴァント関連手形の圧倒的多数は、イズミルとイスタンブルのフランス人代理商からルー商会に引渡された手形であり、これは前者が後者に対する恒常的な債務を負っていたことを意味する。それゆえ説明すべき問題は、この債務を発生させる国際商業のメカニズムである。

まずイスタンブルの場合には、この債務は伝統的な貿易収支の不均衡から生じる。官僚・軍人・聖職者など多数の「非生産的」人口を抱えるオスマン帝国の首都は、高級毛織物を筆頭とするヨーロッパ商品の消費市場だったが、この都市と周辺地域では輸出向けの商品がほとんど生産されず、ヨーロッパ諸国に対する慢性的な輸入超過の状態にあった。それゆえイスタンブル在住の外国商人にとって永続的な問題は、販売商品の売上金をいかにして本国に送還するかに関わっていた。そして余剰資金の運用を求めて、彼らは必然的に為替業務または銀行業務を営むようになる。17世紀から広く行われた運用は、他のレヴァント市場に対する資金供給であり、それには通常イズミルやアレppoに居住するヨーロッパ商人が、ペルシア産生糸などの輸出用商品を現地で購入するために、イスタンブル在住の商人に宛てて為替手形を振出す方法が用いられた。この手形を買取るのはオスマン帝国の地方行政官または徴税請負人であり、彼らはそれをスルタンの金庫に納入すべき租税収益の送金手段に用いた。こうして為替を媒介とする国際商業と国家財政との相互依存関係が形成され、イスタンブルの売上金は他の諸都市から輸出される商品の形で本国に送還されたのであ

る(図表20)²⁷⁾。この決済方法は18世紀を通じて存続し、ペルシア隊商の衰退に伴う貿易構造の変化にもかかわらず、フランス商人の間で広く用いられた。しかし世紀後半にイスタンブルが国際的貨幣市場として成長するにつれて、フランス商人はより直接的な決済方法、すなわちマルセイユ宛または他のヨーロッパ諸都市宛の為替手形を買取り、それをマルセイユ商人に送付する方法を頻繁に用いるようになる。²⁸⁾アメリカ独立戦争前後の時期に、ジャン＝アンドレ・アンリ商会やアンリ・ダヴィド商会が行なった活発な為替取引は、その典型的な実例を示している。

これとは反対に、イズミルにおける伝統的な貿易構造は、フランスを含むヨーロッパ諸国に対する輸出超過を基盤として成立した。たしかに18世紀のイズミルは、フランス製毛織物やアメリカ植民地物産のためにレヴァント最大の販路を提供した。しかしペルシア産生糸貿易が衰退した後も、イズミルはアナトリア産の綿花、綿糸、山羊毛糸、駱駝毛、茜根などの輸出市場として繁栄し、貿易収支はレヴァント側の恒常的な黒字になったのである。それゆえこの都市のフランス人代理商は、むしろマルセイユ商人に対して債権をもつ傾向にあり、引渡手形を送付する必要は少なかった。ルー商会の場合にも、1785年以前に参与した手形数は相対的に少なく(91枚)、しかもその一部は同商会に対する振出手形だった。一例を挙げれば、当時ルー商会の親密な取引先だったカイヨル商会は、イズミルからの輸出商品の代金を取り立てるために、時にはイスタンブルのジャン＝アンドレ・アンリ商会宛に、時には直接ルー商会宛に為替手形を振出している。²⁹⁾

この貿易構造を根本的に変化させたのが、フランス革命前夜の数年間に驚異的な成長をとげた貨幣貿易と為替投機である。地中海商業における貨幣の大量輸送は、序論にも述べたように、それ自体として新しい現象ではない。しかし18世紀末に発展する国際的投機の特徴は、第一にマルセイユからの輸出に先立って、スペイン・ピアストル銀貨がオーストリア・ターレル銀貨に改造されたこと、第二にレヴァントに輸送された貨幣は商品購入にではなく、一種の為替裁定取引に用いられ、その売却代金は為替手形でマルセイユに送還されたこ

とである。女帝マリア＝テレジアの肖像を刻んだターレル銀貨は、早くも世紀中葉からオスマン帝国内部に浸透し、七年戦争後にはマルセイユ商人やリヴォルノ商人が最初の輸出を試みた。しかし第一次ロシア＝トルコ戦争(1768-1774年)とアメリカ独立戦争の時期には輸送がしばらく中断されたようであり、その本格的発展はヴェルサイユ条約以後に開始する。カイヨル商会の書簡が証言するように、ルー商会は1786年頃を境に商品貿易を部分的に放棄し、貨幣貿易に重点を移行させた。³⁰⁾

ルビュファとクルデュリエの研究に基づいて、この事業のメカニズムを再構成すれば次のようになる。まずカディスからパリに至る各地の取引先の委託勘定または分配勘定によって、ルー商会はピアストル銀貨を海路または内陸路経由で調達する。同商会はその一部をマルセイユ市場で売却し、またはパリの取引先に転送するが、他の一部をリヨンとストラズブル経由でオーストリアのギュンツブルク(Günzburg)造幣所に、またはジェノヴァ経由で同じくオーストリア領内のミラノ造幣所に送らせる。ピアストル銀貨はそこでターレル銀貨に改造され、再び同じ経路でマルセイユに返送される。ルー商会は受取った貨幣の約半分をその場で売却し、残りの半分をレヴァントに輸出する。主要な輸出市場はイズミルであり、ターレル銀貨の大部分(約9割)を吸収する。残りの部分は、ほぼ同量のピアストル銀貨とともにイスタンブルに輸出される。このような不均衡が生じた原因は、第一にターレル銀貨が首都よりも地方で広く流通し、人気も高かったからであり、第二にスルタン政府がこの銀貨を造幣所に集める目的で、首都での相場を低めに固定したからである。ともあれ1786-1790年の間に、ルー商会が輸出したターレル銀貨の総量は100万枚を超え、これにピアストル銀貨を加えた合計金額は700万リーヴルにも達した。³¹⁾

以上の一連の事業に参加した人物群を検討すれば、引渡手形に関わる問題はほぼ解明されることになる。まずマルセイユ＝ギュンツブルク間の往復輸送については、リヨンの銀行業者クロード＝エメ・ヴァンサンが主要な共同事業者であり、ターレル銀貨の売買はヴァンサンとルー商会の分配勘定、または前者から後者への委託勘定で行なわれる。またマルセイユ＝ミラノ間の往復輸送路

では、ジェノヴァ商人ニコロ＝イニャーツィオ・パツラヴィチーノ(Niccolo Ignazio Pallavicino)を中継輸送業者として、ミラノの「御用銀行業者」ジュゼッペ・タンツィおよびリヴォルノのウツィエリ兄弟&ダヴィド・アルキヴォルティ社がルー商会との分配勘定により事業に参加し、さらにジェノヴァのドミニク(ドメニコ)・チェレジアも同じ条件で協力している。次にレヴァント向け銀貨輸出と現地市場での販売に関しては、事業参加の形態はさまざまであり、ルー商会は時にはヴァンサン³²⁾の委託勘定で、時には同人との分配勘定で、また時には自己勘定で銀貨を輸出し、イズミルの現地代理商ポリ、トルネジ商会、エスカロン商会、マルタン&ルブール社、ドニ・ロラン商会にその販売を委託する。さらにルー商会は、レヴァントの代理商または取引先との分配勘定による輸出をも営み、イズミルのカイヨル商会、ポリ、トルネジ商会、ルベン・フランケッティ、イスタンブルのジャン＝アンドレ・アンリ商会、グルデス、クレスパン商会、ペラン兄弟商会と協力している。

多くの説明は不要であろう。引用したすべての人名は、手形譲受人として名前の散見されるパツラヴィチーノを含めて、レヴァント＝マルセイユ間の手形引渡経路とその譲渡経路とを完璧に再現し(図表11-13)、引渡手形が銀貨輸出の代金決済および取引先間の勘定清算に用いられた事実を証明する。すなわちレヴァントの代理商はターレル銀貨を売って為替手形を購入し、これをルー商会に送付して銀貨の代金を決済するが、ルー商会はこの手形の一部に裏書してリヨン、ミラノ、リヴォルノなどの取引先に転送し、相互の勘定の清算に用いるのである。こうして貨幣貿易のプロソポグラフィは引渡手形のそれに一致し、世紀末におけるレヴァント関連手形の増加は、ルー商会による貨幣貿易の発展を端的に証言する。

(B)振出手形。レヴァントの代理商からルー商会に引渡された手形は、現地のフランス商人または「外国」商人が、マルセイユ宛またはその他のヨーロッパ諸都市宛に振出した手形の一部であった。ここで次の区別に注意しなければならない。ルー商会とその現地代理商にとっては、ターレル銀貨の売上金を回収

するために、マルセイユ宛手形とアムステルダム宛手形とのどちらを買取るかの選択は、為替裁定取引の問題に属する。これに対して現地のフランス商人がマルセイユ宛に、またはギリシア商人がアムステルダム宛に手形を振出す目的は、それぞれの取引先に対する債権の回収にある。そこで最後に考察すべき問題は、この債権を創出するもう一つの国際商業のメカニズムである。

しかしこの商業メカニズムの研究は、ただちに史料上の困難にぶつかる。すでに繰り返し述べたように、一般に振出側と引渡側とは相互に別々の取引回路を構成するので、振出人や支払人とルー商会との間に取引はなく、したがって彼らに関する直接の情報はルー商会文書には見出されないからである。同商会のポートフォリオに保存された少数の振出通知を除けば、さしあたり有用な史料は、レヴァントの代理商が同商会に送った書簡に含まれる間接的情報である。それらはイズミルからの多様な商品輸出、とりわけ世紀後半に急成長をとげた綿花輸出の代金回収が、手形振出しの主要な目的だったことを証言する。例えば1777年11月にカイヨル商会がリヴォルノのジョヴァンニ＝カルロ・ジェーラに宛てた振出通知は、前者が後者宛に発送した茜根10袋の代金請求として、ルー商会を受取人とする金額251ピアストル12ソルディの手形を振出したことを知らせる³³⁾。またカイヨル商会はマルセイユのラティ兄弟社とも取引があり、彼らに宛てて山羊毛糸、赤色綿糸、駱駝毛などの商品を頻繁に輸出しており、前者が後者を支払人として振出した手形は、明らかにこれらの商品代金の決済に用いられた(図表15-①)。そして1787年2月にジャン＝バティスト＝ベルナル・ロボリがマルセイユのマジャストル兄弟商会に送った振出通知は、綿花10梱の輸出代金として、ルー商会を受取人とする金額2,200リーヴルの手形を振出し、これをポリ、トルネジ商会に売却したと通知している(図表15-②)³⁵⁾。

当時イズミルの主要な輸出商品が綿花であり、綿花市況が為替市場の動向を決定したことについては多数の証言がある。またギリシア商人がこの輸出貿易の大部分を掌握していた事実についても、複数の証言が得られる。例えばイスタンブルのアンリ・ダヴィド商会は、ルー商会に宛てた1782年2月の書簡の中で、「イズミルのギリシア人およびその他の外国人が、オランダ、イギリス、

イタリア向けに大量の綿花を購入するので、貨幣が極端に不足し、手形が供給過多になっています。われわれの同国人もまた、護送船団用の買付けは終わったのに、依然として購入を続けています」と述べている。またカイヨル商会は1785年3月に綿花相場の上昇を伝え、「きわめて有利な市況情報をオランダから受取ったので、ギリシア人が最も大量に買付けています」と書いている。同様にポリ、トルネジ商会は1787年5月に「現在まで市場に手形を供給したのは、キリスト教世界全域の市場に向けた綿花輸出でした」と述べ、やや後に「ギリシア人商社が供給するオランダ宛手形」に言及し、綿花収穫後の12月には「綿花が大量に輸出される期間だけ」安価な為替を利用できると助言する。最後にドニ・ロラン商会は1788年12月に綿花を「為替の体温計」と表現し、イズミル市場の実態を適切に要約した。³⁶⁾

同じくイスタンブル市場に供給される手形の大多数は、引用したアンリ・ダヴィド商会の書簡が示唆するように、おそらくイズミルからの綿花輸出の代金回収に関連する。イズミルで振出され、イスタンブル在住の受取人により裏書されるヨーロッパ諸都市宛の手形については、ほとんど説明を要しない。イスタンブル在住のフランス商人が、マルセイユ商人宛に手形を振出す理由についても、理論的説明が可能である。ルー商会のように毛織物や植民地物産を大量に輸出する商社は、イスタンブルに多額の債権を保有し、しかもこの資金をイズミル貿易に投入する必要は比較的少ない。これに対して輸出部門には関心または能力を欠き、むしろレヴァント商品の輸入に重点を置く多くのマルセイユ商人の場合には、イスタンブルの資金でイズミル市場での商品購入をまかなうことは困難である。それゆえイズミルの代理商がイスタンブルの代理商宛に振出した手形の支払金額の少なくとも一部は、この後者がマルセイユ商人宛に振出す第二の手形によって請求されることになる。イスタンブルで振出された手形が、むしろ1785年以前に多く見出される(66枚)事実も、以上の文脈から理解される。ターレル銀貨輸出が増加し、イズミルの貨幣市場が発達するにつれて、この都市のフランス商人がイスタンブルの資金に依存する必要性は、相対的に低下するからである。³⁷⁾

それゆえ手形支払人の所在地が、レヴァント産綿花の主要な輸出先に一致するのは当然である。イズミルに集荷されるアナトリア産綿花の一部は、フランス商人の手でマルセイユに輸出され、そこから北フランスの繊維工業都市ルアンに向けて再移出された。他の一部は、テサロニキに集荷されるマケドニア産綿花とともに、トリエステ、ヴェネツィア、リヴォルノ、ジェノヴァ、アムステルダムに向けて輸出され、それらの港からアルプスを越えて、またはライン河を遡行してドイツとスイスの綿工業地帯に供給された。ただしマケドニア産綿花の大部分は、テサロニキからベオグラードに至る内陸路で輸出され、さらにドナウ河を遡行してウィーンに到着する。それはアドリア海とトリエステ経由で輸送された綿花と同様に、ライプツィヒを筆頭とするドイツとスイスの諸都市に向けて再輸出される³⁸⁾。要するにマルセイユ、アムステルダム、リヴォルノ、トリエステ、ウィーンなどは、いずれもレヴァント産綿花の大中継市場であり、これらの都市に居住する手形支払人は、主にこの商品を取り扱う貿易商人だった。特にギリシア商人の場合がそうであり、18世紀中葉以降、彼らはウィーンを中継市場とする綿花貿易を独占し、オーストリア国際商業の大部分を掌握することに成功した³⁹⁾。また世紀末にマルセイユに進出を開始したギリシア商人も、主として綿花貿易に従事していた⁴⁰⁾。そして前述のように、彼らの多くが19世紀にもトルコ産綿花やロシア産小麦などの貿易を営んだ事実は、彼らが為替取引に専門化した銀行業者ではなく、商品取引を優先する貿易商人だったことを証明する。

こうして直接的史料の不足にもかかわらず、振出手形が主に綿花輸出の代金回収に用いられたことは疑いない。それゆえ振出手形のネットワークは、いわゆる産業革命の前夜において、勃興期のヨーロッパ綿工業に原料を供給する輸送網であり、オスマン帝国から放射状に拡大しつつある「離散」のギリシア商人の国際組織が、その中核部分を構成する。ルー商会の営む貨幣貿易は、この商品貿易と密接な相互依存関係にあり、両者は一体になって18世紀末の世界経済の転換を促したのである(図表21)。

結 論

データの解析と考察とを締めくくるに当って、利用した史料の限定的性格について再び強調する必要がある。なぜならばルー商会のポートフォリオは、特定の事業方針に基づいて実行された選択と投機の結果であり、必ずしもレヴァント為替市場の忠実な反映ではないからである。一例を挙げれば、ルー商会の貨幣輸出と為替取引はイズミルとイスタンブルに集中し、18世紀後半におけるフランス＝レヴァント貿易の集中傾向を代表するが、しかしこれを直ちにヨーロッパ商業全体の傾向と見做すことはできない。とりわけテサロニキはイズミルと並ぶ綿花取引市場であり、同時にヨーロッパ宛手形の供給市場でもあったが、この都市で振出された手形はルー商会文書にはほとんど見出されない。おそらくその理由は、マケドニア産綿花の品質がフランス紡績業の技術に適合しなかったので、フランス商人の取引量は相対的に少なく、⁴¹⁾ルー商会もこの市場に多くを期待しなかったのである。もう一例を挙げれば、ロンドンを支払地とする手形が極端に少ない事実は、イズミル市場におけるイギリス商業の不在を意味するわけではない。アンリ・ダヴィド商会の書簡も言及するように、イギリスはレヴァント産綿花の重要な販路であり、また手形の主要な支払地のひとつでもあった。⁴²⁾それがルー商会のポートフォリオ中に見出されないのは、おそらく同商会とロンドン実業界との関係が比較的稀薄だったからであろう。⁴³⁾

以上の留保を別にすれば、レヴァント為替市場の基本的メカニズムは明らかであり、本稿の分析はこの点でルビュファ、クルデュリエ、エルデムの諸研究を補完する。すなわちイズミルとイスタンブルの外国為替相場は、ターレル銀貨やピアストル銀貨の流入によって上昇し、綿花の収穫と輸出によって下降する。これらの経済的要因に加えて、オスマン帝国の政治的事情も作用する。とりわけ戦争は直ちに財政を圧迫し、国家による貨幣の調達が強行されるので、貨幣流通量は減少し、為替相場は下落する。またこれとは反対に、スルタン政府が巨額の賠償金や援助金を支払うことを余儀なくされた場合には、それらを送金するためにヨーロッパ宛手形を大量に買取るので、為替相場は高騰する。

第一次ロシア＝トルコ戦争終結後のロシアに対する賠償金、第二次ロシア＝トルコ戦争(1787－1792年)勃発直後のスウェーデンに対する援助金の支払いがその例である。⁴⁴⁾

ただしこれまで十分に論じられなかった問題のひとつは、商品貿易と貨幣貿易の国際的な相互依存関係である。前述の諸研究は、振出手形と引渡手形との区別を考慮せず、事業の主観的側面であるルー商会の貨幣投機と為替裁定取引にのみ着目した。しかし客観的側面すなわち振出側から見れば、それはヨーロッパ諸国へのレヴァント商品輸出のために貨幣を供給する役割を演じ、為替手形は文字通り国際金融の手段として機能した。さらにこの貨幣供給が、商品輸出を媒介して、オスマン帝国財政を間接的に支える役目を果たした点をも考慮するならば、ルー商会の事業の歴史的意義は、フランス国民経済や二国間貿易収支の次元ではなく、ヨーロッパ全域とオスマン帝国とを包括する多面的な経済関係の文脈で理解される必要がある。

為替手形の人物誌研究は、一方でルー商会の取引網を再構成し、他方では特にギリシア商人の国際ネットワークを浮かび上がらせた。前者はある程度まで従来の諸研究から予想された結果であり、研究の意義はその確認にある。これに対して後者は予想外の発見であり、まだ十分に解明されていない現象について、ルー商会文書が貴重な情報源になりうることを証明する。古来のイスラム法で「ジンミー」(zimmi)、オスマン帝国では特に「ミレット」(millet)の名で呼ばれた非ムスリム集団が、レヴァント貿易の分野で重要な役割を演じたことは一般に知られている。彼らの中で17世紀に黄金時代を築いたのはアルメニア商人であり、アジアとヨーロッパに跨がる彼らの商業活動は、ペルシア産生糸の輸出を原動力として発展した。⁴⁵⁾ これに対して、本稿の分析から明らかのように、ギリシア商人はレヴァント産綿花の輸出貿易を原動力にして、18世紀末から急速に台頭する。ただし当時のマルセイユが彼らの商業網に含まれなかったのは、この自称「自由港」が外国商人の貿易に20%税を適用し、彼らの参加を排除したからである。この制度は1781年に一度廃止されたが、1785年に再建され、その後も数回の曲折を経て、ようやく1815年に最終的に廃止される。⁴⁶⁾ ギリ

シア商人のマルセイユ進出はそれ以降に本格化し、この新たな拠点を跳躍台にして、彼らの貿易活動は19世紀後半にその繁栄の絶頂に達する。

ギリシア商人の国際的台頭または「ヘレニック・インターナショナル」の形成は、地中海貿易の相貌を変化させたばかりでなく、やがてギリシア独立運動の発生と展開に決定的な影響を及ぼした。なぜならばイスタンブルの「ファナリオット」(Phanariotes)がオスマン帝国内部の特権的貴族層を構成し、むしろ保守的な政治思想に傾いたのに対して、キオス島とイズミルを拠点とする新興の商業ブルジョワジーは、進出先の西ヨーロッパ諸国でフランス革命を始めとする政治的・思想的激動を体験し、その影響下にギリシア文化復興と政治的独立を目指す革命的運動を創出するからである。⁴⁷⁾ こうしてウィーンでは富裕なギリシア商人の資金援助を受けて早くから政治結社が組織され、また1811年以降のキオス島では、前述のロドカナキ家やラッリ家を筆頭とする在外ギリシア商人の支援によって教育・文化施設が整備された。さらに1809年にパリで設立され、独立運動の先駆的拠点になった秘密結社「ギリシア語会館」(Hôtel Hellenophone)にはピエトロ・ホメリディ・スキリッジ、テオドロ・ブラッサカキその他のキオス島出身の商人が加入し、同様に1814年にオデッサで創設された秘密結社「フィリキ・ヘタイリア」(Philiki Hetairia)にはスキリッジと彼の親戚テオドロ・ホメロが加入する。そして独立戦争勃発以後のマルセイユでは、スキリッジ、ホメロ、ブラッサカキが、パンタレオン・アルゲンティやミケーレ・ペトロコキノと並んで、義勇兵受け入れと海上輸送に中心的役割を演じる。⁴⁸⁾ 要するに地中海貿易における「ヘレニック・インターナショナル」の台頭は、ギリシア独立運動を直接に準備し、それを推進した。この観点から見れば、レヴァント産綿花はヨーロッパ産業革命に貢献したばかりでなく、ウィーン体制の反動的秩序を破壊する起爆剤にもなったのである。

註

- 1) 本稿は『史淵』132輯(1995年)に掲載された同名の論文の続稿である。前稿に用いた史料と文献の表記や略号は、本稿でもそのまま用いられる。
- 2) ラザル・ダルマス商会とラサル、リクルフ商会の書簡は、A.C.C.M., L.IX 707, 711に見出される。
- 3) この場合に、手形文面上は受取人が買取人に一致する。この形式の取組が一般化するにつれて、19世紀には「買取人」の概念が消滅する。この問題に関しては、わたくしの前々稿「ルー商会文書の為替手形」(『史淵』131輯、1994年)を参照。
- 4) スリアン一族については、Louis Bergasse et Gaston Rambert, *Histoire du commerce de Marseille*, t.IV, *De 1599 à 1789*, Paris, 1954, p.506, 520; Ch. Carrière, *Négociants marseillais*, t.I, p.118-119. マジャストルについては、Bergasse et Rambert, p.381, 633, n.2.
- 5) キックについては、Carrière, *op. cit.*, t.I, p.250, n.54; p.276, n.147.
- 6) エティエンヌ・マルタンはマルセイユで人望のある名士であり、1789年11月には市参事会員、翌年初頭には市長に選出されている。*Ibid.*, t.I, p.117, 215; Edouard Baratier (dir.), *Histoire de Marseille*, Toulouse, 1973, p.271.
- 7) Carrière, t.I, p.124, 886, n.42; p.903.
- 8) イズミルの代理商は、彼らの買取った手形について、その署名が「優良」で信用できるものであることを、繰り返しルー商会に書き送っている。例えば A.C.C.M., L.IX 729(Caillhol et C^{ie}), 3 octobre et 1^{er} décembre 1786; L.IX 748(Porry, Tornézy et C^{ie}), 3 février 1787; L.IX 750(Denis Rolland et C^{ie}), 18 décembre 1788.
- 9) 以下のギリシア商人に関する人物誌研究は、主として Pierre Échinard, *Grecs et philhellènes à Marseille, de la Révolution française à l'Indépendance de la Grèce*, Marseille, 1973 に依拠している。バルタッジとパナヨティについては、*Ibid.*, p.25, n.104; p.160, 298. なお分析中のデータに含まれる唯一のギリシア語手形は、受取人としてイスタンブルのパナヨティ、バイラ商会 (Panagiotti, Baila et C^{ie}) を指名している。ギリシア人名の困難な特定作業については、古代ギリシア史の専門家である鹿児島大学教育学部の伊藤正氏の全面的な協力を得た。同氏の洞察に富む御教示により、研究は大いに助けられた。この場を借りて同氏に厚くお礼を申し上げる。
- 10) ブラッサカキ家については、Échinard, *op. cit.*, p.89-90, 112-113. バカトリについては、Elena Frangakis, *The Commerce of Izmir in the Eighteenth Century*

(1695-1820), thesis PhD, London University, 1985, p.117; *id.*, “The *Raya* Communities of Smyrna in the 18th Century (1690-1820)”, *Proceedings of the International Symposium of History on the Neohellenic City: Ottoman Heritage*, Athens, 1985, p.39. エレナ・フランガキスの論文の多くは、オスマン帝国史研究の泰斗である明治大学文学部の永田雄三氏の御好意により参照することができた。ここで同氏にお礼を申し上げる。

- 11) Robert Mantran (dir.), *Histoire de l'Empire ottoman*, Paris, 1989, p.276, 309, 312, 339, 443.
- 12) Échinard, *op. cit.*, p.277, 296-300; Frangakis, *The Commerce of Izmir*, p.117-118.
- 13) Frangakis, *op. cit.*, p.106, 118. ディサイのギリシア語名はステファノス・イサイウ (Stephanos Isaiou) である。
- 14) Échinard, *op. cit.*, p.117, 271.
- 15) *Ibid.*, p.25, n.104; p.88-89, 112, 298, n.139; Frangakis, p.117-118.
- 16) Échinard, p.87, 132, 280, 292.
- 17) *Ibid.*, p.25, n.104; p.88, 90-91, 112, n.62; p.184, 266, 299-303; Frangakis, *op. cit.*, *loc. cit.*; *id.*, “The *Raya* Communities of Smyrna” (art. cit.), p.36,38-39.
- 18) Échinard, p.179, 182.
- 19) Frangakis, *The Commerce of Izmir*, *loc. cit.*
- 20) Échinard, p.113, 184, 274, 290-291, 297, 299-300.
- 21) *Ibid.*, p.60-62, 87, 89, n.65; p.131-132, 184, 270, 296-298, 299, n.144.
- 22) Frangakis, *op. cit.*, p.105-106.
- 23) *Ibid.*, p.108.
- 24) Louis Dermigny, “Escalaes, échelles et ports francs au Moyen Age et aux temps modernes”, in: *Recueil de la Société Jean Bodin pour l'histoire comparative des institutions*, t.XXXIV, *Les grandes escales*, 3^e partie, Bruxelles, 1974, p.583-584.
- 25) A.C.C.M., L.IX 734 (Cousinéry frères), 4 juin 1790.
- 26) ルベン・フランケッティのルー商会宛書簡は、A.C.C.M., L.IX 735。わたくしが彼をリヴォルノ出身のユダヤ人であると推定する理由は次のとおりである。①同時代のリヴォルノには、ルー商会の取引先としてイザークおよびレモン・フランケッティの名が知られている。②ルベン・フランケッティは一度だけ手形振出人として現われるが、その支払人はリヴォルノのユダヤ商人レカナーティ兄弟&レオン・テ

デスキ社である。③リヴォルノの支出人リストにはフランケッティ&エンリケ社 (Franchetti et Enriche) の名が見出されるが、この手形の振出人はテュニス在住のイザーク・デ・モゼ・エンリケ (Isaque de Moseh Enrique) であり、フランケッティ一族とセファルディ系ユダヤ人との関係を証言している。

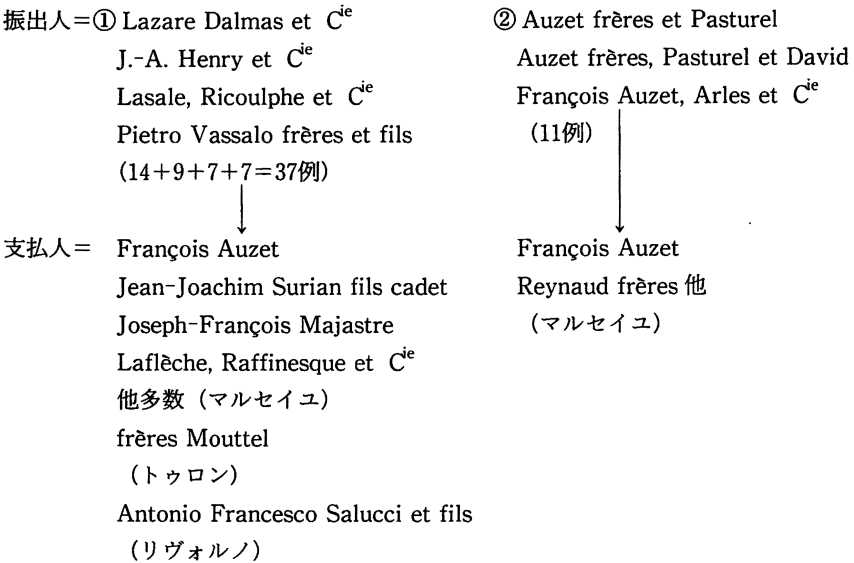
- 27) Edhem Eldem, *Le commerce français d'Istanbul* (op. cit.), p.129-144.
- 28) *Ibid.*, p.145-168; Ch. Carrière et M. Courdurié, "Un sophisme économique: Marseille s'enrichit en achetant plus qu'elle ne vend", *Histoire, économie et société*, 1984-n° 1, p.37. イスタンブルのフランス商業一般については、Eldem, op. cit., p.24-101; Robert Paris, *Histoire du commerce de Marseille*, t.V, *De 1660 à 1789. Le Levant*, Paris, 1957, p.452-466.
- 29) A.C.C.M., L.IX 729, 16 mars, 15 avril, 3 et 18 mai, 18 juin, 20 septembre, 17 décembre 1785, etc. イズミルのフランス商業一般については、R. Paris, op. cit., p.438-452; Frangakis, op. cit., p.94-103, 130-167.
- 30) A.C.C.M., L.IX 729, 3 octobre 1786 sq.; F. Rebuffat et M. Courdurié, *Marseille et le négoce monétaire international*(op. cit.), p.126-140.
- 31) *Ibid.*, p.14-116, 142-164; Eldem, op. cit., p.217.
- 32) Rebuffat et Courdurié, p.20, 78-79, 84, 100-102, 142, 162-164. 当時の商人=銀行業者の間で広く用いられた「分配勘定」(compte à demi) は、その名が示すように事業参加者の間であらかじめ決められた割合 (1/2または1/3) に従って費用と収益を分配するが、その場合に相互間の代理手数料や手形割引料を費用に含めず、参加者各人の自己負担とする点に特色がある。
- 33) A.C.C.M., L.IX 71, avis du 4 novembre 1777.
- 34) ラティ兄弟社は、多くの場合ルー商会との分配勘定でイズミル貿易を営んでいる。*Ibid.*, L.IX 729, 16 et 20 juillet, 3 août, 24 décembre 1785, 4 janvier, 7 février, 17 novembre 1786.
- 35) L.IX 72, avis du 23 février 1787.
- 36) L.IX 707, 25 février 1782(cité par: Carrière et Courdurié, "Un sophisme économique", art. cit., p.26, n.77); L.IX 729, 14 mars et 2 avril 1785; L.IX 748, 7 mai, 3 novembre, 12 décembre 1787; L.IX 750, 13 décembre 1788. 綿花市況と為替相場との関連自体は、すでによく知られた事実に属する。Cf. Rebuffat et Courdurié, p.144-147, n.57 et 58; Eldem, op. cit., p.204.
- 37) 以上の問題に関しては、エドヘム・エルデムの学位論文は手形振出しの理由についての考察を欠き、有用な知識を与えない。Eldem, p.145-154. イスタンブル市場

- とイズミル市場との密接な関係については、Paris, *op. cit.*, p.441; Frangakis, *op. cit.*, p.32.
- 38) Archives nationales(Paris), Marine B⁷ 418, “Mémoire de la Chambre du Commerce de Marseille sur le transit en franchise de tous droits, des marchandises du Levant qui vont de cette ville à Genève, en Suisse, en Allemagne et autres pays étrangers”, 22 novembre 1766.
- 39) N.G. Svoronos, *Le commerce de Salonique au XVIII^e siècle*, Paris, 1956, p. 197-198.
- 40) Frangakis, p.114.
- 41) 註38に引用した史料を参照。とはいえ世紀後半にはフランス向け綿花輸出量はかなり増加した。Paris, *op. cit.*, p.480-485, 510-515. これに並行して、テサロニキのフランス商人は徐々にイスタンブル、イズミル、ヴェネツィア、ドイツ宛の為替手形を取引するようになる。Svoronos, *op. cit.*, p.120-121.
- 42) Cf. Carrière et Courdurié, “Un sophisme économique”, p.37, n.120.
- 43) ルー商会文書に残されたロンドンの取引先の書簡は、例えばアムステルダムやリヴォルノの書簡に比べてずっと少ない。A.C.C.M., L.IX 793-795.
- 44) Rebuffat et Courdurié, p.146-148, 156-158; Eldem, p. 203-209.
- 45) 深沢克己「レヴァント更紗とアルメニア商人－捺染技術の伝播と東西貿易－」(『土地制度史学』第111号、1986年、18-37ページ) 参照。
- 46) Paris, *op. cit.*, p.14-16; Fukasawa, *op. cit.*, p.155-156, n.108; Frangakis, *op. cit.*, p.114.
- 47) Échinard, *op. cit.*, p.127.
- 48) *Ibid.*, p.61-62, 128-133, 144, 199, 209.

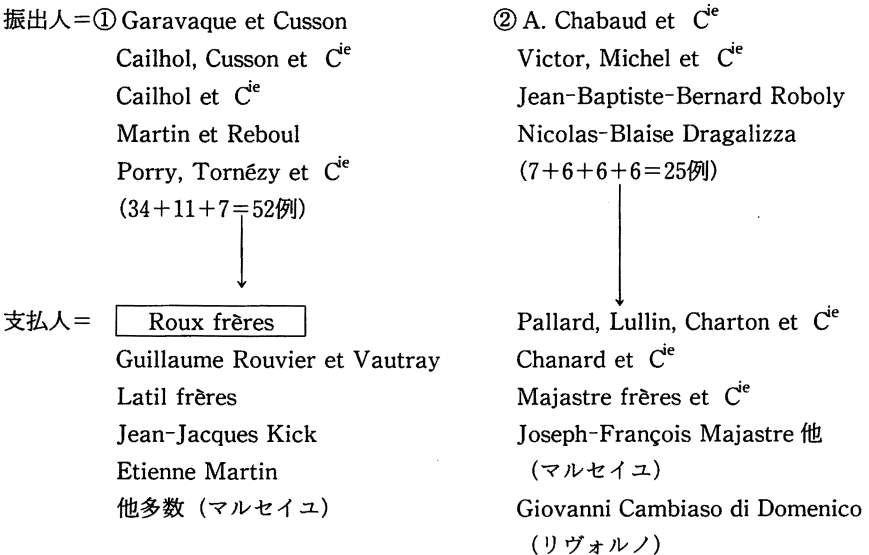
[付記] 本稿は、平成7年度科学研究費補助金・一般研究(B)「18世紀ヨーロッパ商業実務書類の基礎研究」(継続・課題番号06451068 研究代表者: 深沢克己)の研究成果の一部である。

関連図表

図表14：イスタンブル（およびブルサ）からの手形振出経路



図表15：イズミルからのフランス宛手形振出経路



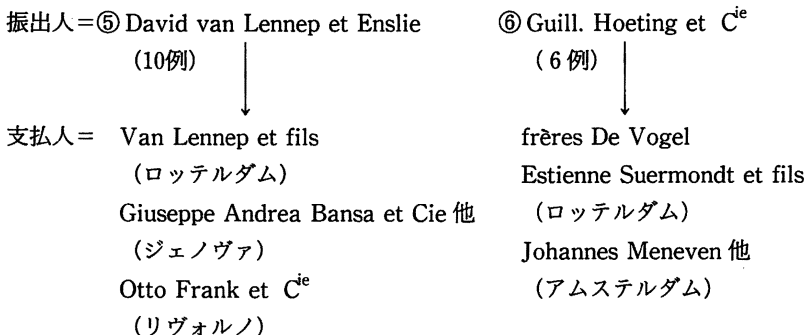
図表16：イズミルからのヨーロッパ宛手形振出経路（1）

振出人=① Curmusi et Baltazzi	② E. Mavrogordato et Diamandi Petrici
Curmusi, Baltazzi et C ^{ie}	Gio. Mavrogordato, Gio. Anastassi et C ^{ie}
Curmusi, Baltazzi, Perachi et C ^{ie}	Mavrogordato, Isaia et Cie
Curmusi, Perachi et C ^{ie}	Roidi, Mavrogordato et C ^{ie}
Demetrio Curmusi, Nicola Panayoti et C ^{ie}	Michele Mavrogordato
Michelle Curmusi (et C ^{ie})	Paolo di C. Mavrogordato
Stefano Curmusi	Stratti Niccolo Mavrogordato et C ^{ie}
(32例) ↓	Paolo Mavrogordato et C ^{ie}
支払人 = Tomasasi et C ^{ie} 他	(19例) ↓
(アムステルダム)	Stefano d'Isay et C ^{ie}
Hartogt, Spykerman et C ^{ie}	Michele Faliero et C ^{ie}
(ロッテルダム)	Stamati Petro et C ^{ie}
Gabriello di Salvatore	(アムステルダム)
Giovanni Carlo Giera 他	Demetrio di Giovanni et C ^{ie}
(リヴォルノ)	(トリエステ)
Francesco Maria Giera et fils	frères Economo et C ^{ie}
(ジェノヴァ)	(ウィーン)
Georgio Cacichopullo et C ^{ie}	
(トリエステ)	

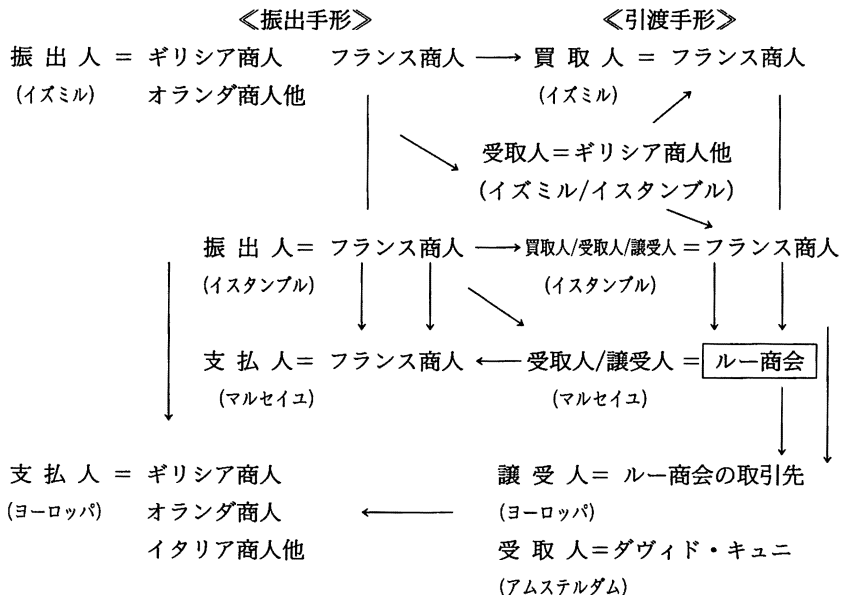
図表17：イズミルからのヨーロッパ宛手形振出経路（2）

振出人=③ Ralli, Psicha et C ^{ie}	④ Georgio Homero
Ralli, Petrocochino, Thoma et C ^{ie}	Gio. Homero fils et C ^{ie}
frères Ralli et C ^{ie}	(6例)
Michelle Ralli et C ^{ie}	↓
Demetrio Theodoro et frères Ralli	
(7例) ↓	
支払人 = Stefano d'Isay et C ^{ie} 他	Petrocochino et Rodocanachi
(アムステルダム)	(リヴォルノ)
frères De Vogel	
(ロッテルダム)	
Paolo Rodocanachi et C ^{ie}	
(リヴォルノ)	
Demetrio Carcioti	
(トリエステ)	

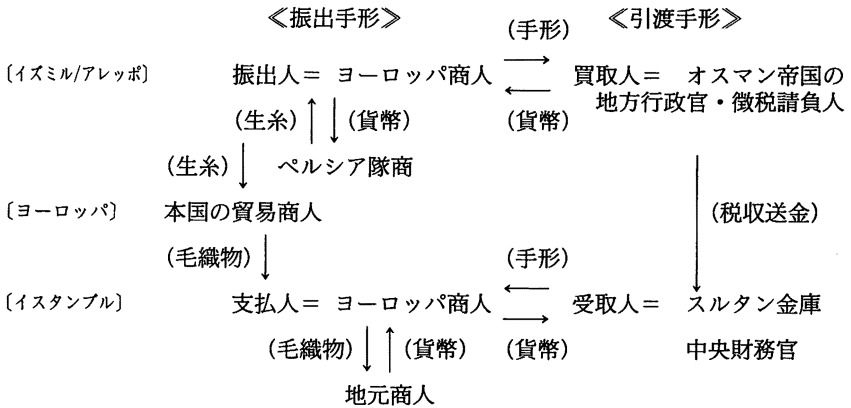
図表18：イズミルからのヨーロッパ宛手形振出経路（3）



図表19：ルー商会とレヴァント＝ヨーロッパ手形流通回路



図表20：イスタンブル商業の伝統的な決済メカニズム



図表21：ルー商会と18世紀末イズミル商業の決済メカニズム

